

三宅義子さんの思い出

パロアルトでの煌めく一日

堀場 清子

1990年の3月、ニューヨークで1年過ごした帰り道の1か月を、夫と私はスタンフォード大学フーパー図書館での資料探しにあて、大学脇の町パロアルトの小さなアパートに住んだ。毎日、二人で図書館に通い、私はプランゲ文庫の検閲資料のマイクロフィルム（雄松堂書店）を閲覧させてもらった。検閲処分に遭った原爆作品を発見しようと、終日、マイクロフィルムにローラーをかけ、日が暮れば、一日分の徒労に溜息をつく繰り返しだった。当時はまだ、日本でプランゲ文庫の検閲資料を見ることはできず、アメリカの主要な大学図書館だけが、雄松堂のマイクロフィルムを収蔵していた。

そんななかでの3月17日、カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校に留学していた三宅義子さんが、遊びにきてくださることになった。電車一本で来られる彼女の到着は、昼ころだったろうか。私が下手な手料理でもてなしたか、どうか、そんな瑣末なことは、みんな忘れてしまった。それほど、その日のディスカッションは素晴らしかった。

ウーマン・リブからフェミニズムへと、日本国内でも高揚した女性解放運動の進み方に、私はたくさんの疑念を抱いていた。そして彼女は、すでに滞米6年、新しいフェミニズム理論が生成する溶鉱炉の中に身を置いて、博士論文の執筆中だった。当然にも、その発言は刺激的だった。「ヒストリー・オブ・コンシャスネス（意識の歴史学）」について。「フェミニストのエピステモロジー（認識論）」について……。

当時、私は『いしゅたる』という、ささやかな女の雑誌を編集発行していた。収入もないのに、ポケットマネーで出したから、僅か17号で潰れた。それでも随時刊行の上、1年間のアメリカ滞在などでお休みをしたから、数年間に亘っている。原稿料は、もちろん無料。それでも、名のある方々から力作を恵まれた。そんな、手弁当で協力し合い、女の地位を押し上げようとした熱い季節があった。言うまでもなく私はそれに、フェミニズム理論を載せたかった。しかし警戒していた。新しく見えても、旧きに滑る危険性があり、隆盛となった「ジェンダー」言説にも、どこか、うさんくさいものを感じ取っていた。

この日、私は彼女の中に、真正のフェミニズム理論を見出した。「それを『いしゅたる』に書いてください」と頼んだ。彼女は、快諾してくれた。気が付くと、とっぷり暗くなっていた。「帰らなければ!」、と彼女は椅子から飛び上がった。この恐怖感は、安全な日本社会に住んでいては、理解しにくい。ウソかホントか、広大なスタンフォードのキャンパスは、夜ともなれば、レイプのメッカだと噂されていた。それで男子学生が、女子学生を送る組織を作ったところ、送り狼になったと、尾緒もついた。電車の駅に向かう道の途中まで、彼女を送って行った。十字路の角に明るい店があって、ちょっとそこに寄り、すぐに出て、店の前で別れた。真っ直ぐな道路を五分も行けば、駅に着く。ただその道路は、住宅街で暗かった。少し歩いて振り返ると、後姿の彼女が、一目散に走っていた。

「アメリカ女性学の現段階——ウィメンズ・ヒストリーからフェミニスト・ヒストリー

へー」と題した彼女の原稿が、当時私たちの住んでいた逗子の家に届いたのは、何月ころだったろう。黄色味がかったノート用紙に手書きした、恐ろしく汚い原稿だった。至るところが、ぐじゃぐじゃと消され、むやみやたらに、ぶら下がりがあった。一読して私は、呆然自失した。その時の感想を正直に書いても、いまさら彼女は怒りもすまい。

それは、日本語の文章になっていなかった。私は生来の怠け者で、修練を要する外国語とはご縁がない。その無知ゆえに、異なる社会に新理論を移植することの、絶望的困難について、考えたこともなかった。ゆえに、なんの躊躇いもなく、彼女に原稿を依頼した。一方、6年半をかけて、英語によるフェミニズム理論の習得に悪戦苦闘した彼女は、その理論を日本語で書いた経験がなかった。その汚い原稿は、さぞかし惨憺たる苦心の結果だったのであろう。

当時使っていたワープロで、ぶら下がりを整理すると、原稿の長さは倍になった。そのままでは、とうてい『いしゅたる』の読者に受け入れられる文章ではなかった。彼女の自尊心を傷つけることを恐れ、「学術雑誌ではないですから」とか、「読者は普通の女性ですから」とか、読者の方が怒りそうな言葉も含め、言い訳を八百も並べながら、「ここの表現には工夫を」とか、「この部分は直した方が……」とか、ズケズケ注文した。そうするよりなかった。しつこい駄目出しの原稿が、太平洋を渡って三往復した。春に帰国しながら、一冊目の『いしゅたる』の発行日が、年を越えての2月4日となっているのは、そのせいで遅れたのだったか。

彼女は想像以上に寛容で、度重なる直しを嫌がるそぶりもなく、「ここまで直せるとは思っていなかった」と、逆に喜んでくれた。その完成稿は、発行と同時に、読んだ限りの人々から絶賛を浴びた。「高良留美子さんに『眼が点になった』って言われたのよ」と、電話の中で弾んだ彼女の声が、私の耳底にはなまなましく残っている。

「伝統的知の産出過程を変えるフェミニストの政治が必要です」、と説くその論文は、24年を経たいま読んでも、新鮮な説得力に溢れる。第23回山川菊栄賞を受けた『女性学の再創造』（ドメス出版、2002年12月14日）より11年を先立ち、日本におけるフェミニズム理論として、見落とせない一篇となった。

真正のフェミニズム理論を体現した三宅義子さんは、今後の女性学にとっても、女性一般の社会的地位向上のためにも、ますます貴重な、そして必要不可欠の存在であったのに、あまりにも早く病み、あまりにも早く死を迎えた。その悲運を、限りなく惜しみ悲しむ。

最後の著書となった『政治とジェンダーのあいだ』（ドメス出版、2014年6月20日）の第一部に、かの「パロアルトでの煌めく一日」の所産も収められている。彼女のまだ意識があった終の日に、その本が出来上がって病床に届けられ、「とても喜んだ」と聞かされたのを、せめてもの慰めとしながら、在りし日を想っている。

